

(博士論文審査及び最終試験の結果)

本論文『フランス語の非動詞文研究』(本編 xi-385p.、資料編 ii-101p.)は、機能統辞論と内心・外心構造とを理論的基盤として、現代フランス語の非動詞文の分析を多くの実例調査を通じて行ったものである。

フランス語はそもそも圧倒的に動詞文が非動詞文を凌駕していて、動詞文においては、原則として、主辞機能の存在が義務的である。しかしながら、一定量の実例を調べれば分かることだが、動詞要素なしの発話が存在し、しかも、動詞文の動詞を省略したものとは考えにくいものが確実に機能している。フランス語研究の歴史は長く層も厚いが、この分野の研究は稀で、多くの文法書においても断片的な記述があるのみで、全体像のまとまった研究はつい最近に至るまでなかったとあってよい。(B. Bosredon: *Les Titres de tableaux*, Paris, PUF, 1997 は絵画のタイトルの分析という限られた資料のものであるので、F. Lefevre: *La Phrase averbale en français*, Paris, L'Harmattan, 1999 が初めての全体像を扱った著作とあってよいだろう。)川島氏がこの点に着眼したのは重要なことである。以下、本論文の全体構成を述べながら諸点について論ずる。

先ず、序章で、談話の他の部分から独立したものとして「文」を定義することから出発する。これは A. Meillet, A. Martinet の文の定義を基盤としている。この定義から出発して経験的にどのような形の文があるかを実際に調べなければならぬというのが川島氏の立場である。動詞を文の中心の述辞とする動詞文は動詞(定動詞)という記号素の使用によりこの独立性が保証される。では、動詞を述辞核としない文(=非動詞文)はどのようにして文としての独立性が保証されるのか、というのが本論文の出発点となる。

次に、第1章では、従来の内心(endocentrique)構造と外心(exocentrique)構造との見直しが行われる。これらの概念が本論文のテーマとなる非動詞文分析の鍵となる概念だからである。内心構造は一まとまりとなって統辞行動する(つまり、一つの統辞機能を担う)ような連辞の構造であり、一まとまりとなって統辞行動しない(一つの統辞機能を担わない)ような連辞の構造は外心構造、と定義される。統辞機能は基本的に従属関係であり、統辞機能を担った拡張(expansion)が核としての述辞(prédictat)の周りに組織されたものの全体が文であるので、このような関係一つにまとめられないということは通常従属性の欠如、つまり、独立性を暗示している。この定義に従うと通常動詞文の「主辞-述辞」は一つの統辞機能にはまとめられないので外心構造であるが、前置詞句や等位関係におかれた連辞などは内心構造ということになる。本論文の主張の一つが外心構造と非動詞文の独立性との関連なので上記の定義は重要である。

以下、第2章から第10章までは、間投詞文、OUI, SI, NON、副詞文、前置詞文・従属接続詞文、不定詞文、疑問詞文、形容詞文、名詞文、代名詞文、とあるように、非動詞文の様々なタイプをその核となる要素の品詞毎に実例を詳細に調査したものである。実例の中には様々なものがあり、外心-内心の判定が難しいものも少なくないが、全般的に外心性が高いものほど文としての独立性が明らかであることが確認されている。例えば、副詞は通常の動詞文では、副詞、形容詞、動詞にはっきりと従属する場合が多い。それ故に独立性は弱いといえる。しかし、Plus tard, certainement. (p.81, 例(41))のように、単独の副詞に収斂せず、全体の内心的統一が弱まっているような場合(つまり、外心性が高まっているような場合)は、全体として文脈に対する形式的独立性は高まっているといえる。

本論文の上記の各章は記述、分析もやや単調で地味であるが、非動詞文の記述的な部分としては全体像を具体的に示す重要なものであるとえいる。

第11章から第20章までは、非動詞文に関係する個々の興味深い問題を取り上げ、それぞれ分析を深めたものといえる。テーマは以下のとおりである。《CE QUI~》などについて、不定詞文と独立性、文の独立性の弱化と動詞命令文について、AVECに関する一考察、非動詞文における名詞限定辞の不在について、Une aspirine et ça passera 型構文と等位接続、過程(procès)をあらわす IL YA 構文、過程(procès)を表す非動詞文、等位接続詞 MAIS と非動詞文 OUI, SI, NON について、Pas de N 型非動詞文。

これに結論としての終章がつづく。結論で強調されていることは、様々な形で現れる外心構造が非動詞文の独立性の確保に貢献しているという点、かつ、この外心構造を「主題-陳述」(cf. 上に引用の F. Lefeuve の著作)のような意味・解釈的概念と混同してはいけないという点である。つまり、川島氏の分析はあくまでも非動詞文の文としての独立性の根幹にある統辞構造の形式的側面に関係している。この点を具体的かつ詳細に解明することにより、フランス語においては圧倒的な動詞文には見られないような文のタイプの基盤と可能性を十分に分析しえたといえる。

この論文の最大の長所としては、問題分析の理論的枠組みを設定し(A. Martinet の機能統辞論)、さらに動詞文構成の考察から得られた内心・外心構造の概念を鍵として再定義し、多くの実例を分析し事実関係を単純化することなく解明、提示しえたことである。また、この問題を体系的に取り扱ったものは

過去にはないが、部分的に取り扱ったものは多々あり、これらの先行研究をかなり詳細に調査し自分のものとしている。(ただし、これらの先行研究が大いに役に立ったということではない。つまり、これ迄は明らかに実例調査が不十分であった。) 収集、分析された用例は多く、かなり珍しいものもあり、フランス語非動詞文のパターンとしてはほぼ網羅的になっているといえるだろう。この実例調査により、フランス語における動詞構文以外の述辞化の多様な可能性は十分に明らかにされたといえる。また、ネクサス化、脱ネクサス化(14章)の分析をはじめとして、個々の分析には大変興味深いものも多い。わずかの差でやはり実例を多く調査している F. Lefeuve, 1999 には先を越されたが、統辞的側面を分析した川島論文は意味的側面を追及した Lefeuve 論文と見事に補完しあっていて、後者に欠けているところを十分に補っているといえる。

本論文の評価すべき点は多々認められるが、問題がないわけではない。

複数の審査員から指摘された主なものとしては次のようなものがあつた。非動詞文の形式面の特徴については明らかになったが、意味面の特徴というののははっきりしない。特に、動詞文が一方に存在し、それに対するものとして出されている非動詞構文は意味的に存在の理由はないのであろうか。この点とも関係するが、本論文の主題にとって「省略」という概念は重要性をもつはずであるが、この点についての分析が不十分ではないか。動詞文でないものを敢えて使う必要性の背後には動詞文が明らかに存在しているのであるから、この点についての議論があつてしかるべきであらう。また、やはりこれと関係して来るが、論文全体の体系的構成がやや弱く多少羅列気味の感があるのではないか。

その他の問題点としては次のようなものがあつた。問題が提起され解決されないままになっているようなところがあるのではないか。基本的に表現は丁寧で分かりやすいが、レトリックの分かりにくいところや誤りが少なからずある。繰り返しが多く全体の調整が不十分なところがある。外心構造だけでは非動詞文の成立は十分には説明しえない場合も多く、ほかの要因も考慮する必要がある。非動詞文の考察では特にテキスト的問題性を重視すべきではないか。文概念への幻想があるようで、これを乗り越えて、テキスト的、発話機能的要因を考慮すべきである。外心構造の重要性が頻繁に援用され、従来の「外心」の見直しがなされているとはいえ、外心という概念を乗り越えていないのではないか。既に発表された論文が再録されているが、博士論文の全体への組み込みのための書き直し、全体の中での配置の仕方が十分考えられていないのではないか。多くの用例を単に機械的に「説明」するのではなくより批判的に捉えるべきであらう。資料分析での独立文の認定は「一義的に再現できないものは省略とはみなさない」という原則によっているようであるが、「二つのピリオドの間」

という書記的、表面的基準に頼りすぎているところがあるのではないか。

上記の批判は適切で特に初めのものはこの論文の基本的な問題点といってよいであろう。しかし、これらは本論文に欠けている点の指摘であり、上述の本論文の成果の価値を損なうものではない。

以上をまとめると、問題点は残るが、川島氏の論文はフランスでの研究も含めて質、量ともに、当該テーマについての、最近の重要な研究の一つであり、審査員全員の一致で博士（言語学）に十分値するものと認められた。